

新潟応用地質研究会の思い出

奥村 義郎*

昭和37年頃と言えば新潟県土木部に転勤する直前である。38年から始まった松之山地すべりを契機にこれからは〔国土の保全〕に身を捧げてみようか？ といった気持ちで砂防課に移り、前の職場において、久しく脾肉の歎の心境だった頃の転機であった。そんなときと記憶しているが、本誌30号に思い出として書かれている中山さん（キタツク社長）達から、みんなで文献のリストをつくる呼びかけがあった。応用地質という分野の資料を分類し整理することは意義のあるものだったし、一人よがりの環境から抜け出す絶好のチャンスだったと思う。同じ組織にいるもの同志が多く視野、観点に立って物事を判断することであり、土木部に移ってからその集まりにより得たものは測りしれない大きいものがあった。砂防課調査係では、湊元さん（財団法人 防災研究協会）、伊藤さん（県小出分所長）が一緒に親切に教えて頂いた。松之山地すべりは長さ3,600M、幅2,400M、面積850 haに及ぶ大規模なもので、昭和37年4月頂部に亀裂が生じ、地すべりの徴候が現れ、同年秋の霖雨期に活発となった。中部地域で最大12cm/日、累加移動距離20 mが記録されている。あれから30年経つがこれほど大きい地すべりは幸い起きていない。いま、手元にある平成元年10月に県砂防課で出された「新潟県の地すべり」に記載されている棚口、小泊、猿供養寺、虫亀、濁沢、馬場、蓬平、玉ノ木、等々は私自身の勤務地での出来事だけに印象深いものがある。

現在、異業種社会との交流が叫ばれている。枠のない自由な発想の場を提供し、一業種にこだわらない、与えられた情報を受けるのではなく、話を交流し意見を交わす必要があるといわれている。孤独では進歩しない社会情勢である。このように多種多様な人間との交流がいつでも必要であると思う。また情報資料を整理して集めるよりも、寄り合い、会合、研究会等での面談の方が有効である場合が多い。現在このような情勢にあるとき、既に30年前にこのことが実行されていたとは実に驚くべきことである。いまさらながら関係者の先見の明に感心するものである。ときあたかも、あちらこちらで20周年、30周年、50周年の記念行事が盛んに催されている。いずれも創立時の苦労話がつきものである。先見の明とそれを実現にいたらしめた苦労の連続が、今日の繁栄をもたらしたという一連の物語が披露される。いずれにも共通することは誰でも気付きながら実行しなかった企画計画の具体的実現である。この応用地質研究会の一連の活動もまたしかりである。

一方、異業種間の融合化の問題がある。災害を取り上げてみても多様な専門職の連携、協力なくしては復旧、防止の手立ての確立に結びつかない。

幸か不幸か我が新潟県は各種災害の発生を提供している。すなわち戦後まもない昭和22年に西頸城郡能生町棚口で長さ2,000 m、幅1,000 m、深さ30m、面積約130 haに及ぶ地すべりが発生し、倒壊住家53戸、被害総面積200 ha、橋梁流失3橋、道路埋没650 m、被害人口500名に及ぶ大きなものだった。数十年前にも大きな被害があった記録があるという。その後これを貴重な経験として地すべり防止法が制定されることになったと聞いている。それから30数年後またしても大きな雪崩に遭遇し、10数名の尊い人命が失われたのである。それを機に雪崩対策防止法制定の機運が高まったのである。二つの災害防止法が広

* 国際航業北陸支店支店長、元副会長、評議員

い日本の中で同町同部落での災害が起因とはまさしく不運としか言いようがない。しかしその後の取り組み方は30年の経験がものを言ったと思う。雪崩を中心とした技術者集団によってあらゆる角度から分析、調査を重ね復旧に、防止に生かされたのである。

昭和39年6月16日午後1時02分、粟島沖を震源地とする新潟地震が発生した。規模はマグネチュード7.5という大きなものであった。このときも今重要視されている産・学・官の活躍が十二分に発揮されたのである。なかでも目立ったのが本地質研究会の活躍であり、そのことがのちの軟弱地盤対策の調査研究の弾みにもなり、大いなる功績を残し、その後日本各地で発生した地震対策の基礎づくりに大きく貢献したのである。

思えば新潟県の昭和30年～40年代は災害の連続であり、後年近代化に遅れをとったと言われる所以であるが、しかし一面からすれば、〔禍を以って福となす〕である。

言うまでもなく県土は前出「新潟県の地すべり」で記載されているとおり、羽越豪雨による東部のマサ地帯の土石流の大災害、中部では第三紀層に発生する地すべり地帯で代表的なものに松之山地すべりがある。西部は糸魚川—静岡構造線以西の中生層、古生層及び第三紀層、第四紀層による構造線による影響を受けた地すべりが多い。しかも急激に発生し死者が多いのが特徴である。

私自身、自然の脅威と認知した上で再び同じ災害を繰り返さないためにも微力ながら挑戦したつもりであるが、大きな災害が未だ鳴りを潜めており、「災害は忘れた頃にやってくる。」の譬が生きているように気に駆られる。

昭和40年に上越方面の現場で、地すべり防災にとりくんだ。貨重な経験だった。周期性をもっているところが多く、古老の言に重みを感じられた。五感による経験がものを言った。昭和41年・42年と連続した豪雨、特に羽越豪雨とされた42年豪雨災害は未曾有の水害土砂害であった。また後年堤防破堤が問題化し加治川災害訴訟として議論された。

当時は現在とは相違し文字どおり関係者は寝食を犠牲にしての日々で病氣しないことは幸運だったことを回顧し、この災害に関連したダム事業の完成が今後より安全にかつ防災の要として生き続けていくことを望んでいる。

職場は変わったものの、背にいつも本研究会の仲間が支えてくれるとの気持ちにが元気づけられたことを、今回振り返りつつ感謝している。今後も発足当時の志を生かし、杵を越えてお互いの知識経験を生かしていくことを期待する。

平成4年5月某日記